

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2017

課題番号：26380751

研究課題名（和文）ジェネラリスト・ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践方法とツール開発の研究

研究課題名（英文）Study on the Development of Methods and Tools for Empowerment Practices in Generalist Social Work

研究代表者

西梅 幸治（Nishiume, Koji）

高知県立大学・社会福祉学部・准教授

研究者番号：00433392

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、利用者をめぐる複合的課題の解決を目標に、利用者の生活に立脚した支援を起点とするジェネラル・ソーシャルワークというわが国独自の理論に基づく方法論の重要性を指摘した。そのなかでエンパワメントは、過程展開と方法、それに基づく成果に影響を与える志向性を備えた概念であることを見出した。

またジェネラル・ソーシャルワークは、生活実体をビジュアル化できる固有な支援ツールを備えており、それを介して利用者自身の主体的な力を促進するエンパワメント実践を展開できると考えられる。そこで、支援ツール活用の具体化に向けたアセスメント指標の検討を、地域包括支援センターに特化して実施した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the theme of empowerment practice methods in generalist social work. First, the study highlighted the importance of methodologies based on the Japanese original theory of general social work, which begins with support grounded in the lives of clients, when addressing the goal of resolving complex issues that surround clients. Among them, empowerment was found to be a concept, the orientation of which influences process development, methods, and their results.

Moreover, general social work can provide unique support tools that facilitate the visualization of living entities, thus making it possible to develop empowerment practices that promote the strengths and power of clients themselves through these support tools. Accordingly, assessment indicators were examined toward substantiating the use of support tools for the specific case of Community Comprehensive Support Centers.

研究分野：社会福祉

キーワード：社会福祉関係

1. 研究開始当初の背景

本研究テーマに関連する最近の実践・教育的動向をみると、わが国においては、社会状況の変化により、ソーシャルワーク専門職が対応する利用者の生活問題が多様化・深刻化・長期化の一途を辿っている。そのため複合課題を抱え各領域の専門性のみで問題を解決することが困難となっている現状である。このような現場では、例えば2012年度より開始された認定社会福祉士制度においても、ジェネラルな力量の必要性が指摘されているように、ジェネラリスト・ソーシャルワークの重要性が高まっている。

この現状に伴い研究動向をみていくと、ジェネラリスト・ソーシャルワークと呼称される方法論の必要性が指摘され、先進している米国からその研究と実践知が積極的に導入されている。またこの方法論については、すべての社会システム・レベルにおける利用者のエンパワメントに向けた適切なインターベンションを用いることを重視し、エンパワメント概念をその中核的な実践方法として積極的に取り入れる傾向にある。

このような動向を鑑みると、ソーシャルワークが展開される各領域を超え、共通基盤を整理しながらわが国独自の新しい応用的方法や、展開過程の精緻化を目指すことが不可欠となってきているといえよう。

2. 研究の目的

本研究では、ソーシャルワーク実践方法論のなかで、近年重視されているジェネラリスト・ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践に着眼し、わが国における実践フィールドで応用可能な理論に基づく実践方法論の構築を目的とする。またその実践において特にアセスメント局面で、利用者とワーカーとの協働による実践展開を可能とする方法論を構築することが本研究の焦点である。この協働アセスメントの実践への具体化を、コンピュータ支援ツールの開発・活用によって図り、実践で活用可能な方法論について検討していきたい。

3. 研究の方法

以上のような背景と目的をふまえ、まずジェネラリスト・ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践方法を理論的に整理する。そして実践場面での適用に関しては、アセスメント局面に特化し、実証的に調査を行いながらその方法の確立と、そのなかで活用する支援ツール開発及びその有効性を検討する。

4. 研究成果

(1) ジェネラル・ソーシャルワークへの着目

現在のわが国では、利用者をめぐる生活問

題が多様化・深刻化・長期化の一途を辿っている。複合的課題を抱え、各分野や領域の専門性、さらには各方法や各種アプローチのみで問題を解決することが困難となっており、この現状を打開するための方法論が求められている。このような現状に応じて、ジェネラリスト・ソーシャルワークの重要性が指摘されているものの、必ずしも本来の意味で理解されず、例えば総合窓口としての対応や社会資源の調整に重点化した how to へと逸脱していく恐れがある。加えてわが国の実態に即応はできても、根本的解決に向けた本質が損なわれるという懸念をもたざるをえない。

一方でわが国におけるソーシャルワークの独特な発展経緯からも、その視点や発想を考慮せず、単に方法のみの輸入では真の意味で浸透しないだろう。歴史的にわが国は、社会福祉とソーシャルワークをめぐって、方法・技術と制度・政策、理論と実践が乖離しながら発展してきた傾向がある。そのため再度、その問題を利用者の生活に立脚しながら、については実践方法の側面から、そしてについては実践へ通じる理論の側面から包括・統合、そして創造していく視点や発想により、方法論自体を問い直すことが必要となっている。本研究では、このような意味で、海外から紹介されているジェネラリスト・ソーシャルワークと一線を画し、わが国の実態に呼応する高度専門職業としてのソーシャルワークの方法論であるジェネラル・ソーシャルワークを中心に据えて検討していくことにした。

(2) ジェネラル・ソーシャルワークの概念特性

ジェネラル・ソーシャルワークの概念特性については、太田(2013)によって、学際的諸科学からの科学的・専門的知見に裏打ちされた支援科学を背景に、ソーシャルワークの専門的実践行動概念を構成する基礎・理念構造としての価値・知識、そして応用・実践構造としての方策と方法を基盤に、次のように整理されている。

人間と環境への視座：ホーリズム〔統合的全体性/共生/相互変容関係/国際連帯社会〕

人間生活への視野：生活コスモス〔固有性/実存性/不可視性/可塑性〕

利用者中心の発想：利用者本位〔権利義務/社会的自律性/人権/社会正義〕

事象のエコシステム理解：生態把握〔システム分析/時系列変容/エコシステム把握/方法の構想化〕

問題認識と解決過程：価値創造〔ニーズの複雑多岐化/生活の多様性/状況アセスメント/解決過程推進〕

多角的方法展開：参加・協働〔レポーター活用/統合的実践/多職種連携/地域NW〕

理論と実践の統合化：ツール活用〔科学

的知見/可視化/支援技術/構想展開)
施策の実践的統合化：フィードバック
〔業務点検/改善整備/改善計画/施策改革〕

この概念特性は、具体的に解説していくとまず、 については、人間と環境の両側面をトータルに把握することへの価値を基礎とする特性である。これは、ホーリズムという人間と環境をその相互変容関係を含めた統合的全体性として理解する視座であり、そこから共生や国際連帯社会への価値を志向する基礎・理念的特性である。次に については、利用者が営む人間生活そのものに焦点化することへの価値を基礎とする特性である。これは、生活コスモスと呼ばれる利用者の生活世界をめぐる視野であり、不可視的で可塑性に富み、変化する連続体である利用者生活の固有性や実存性に価値をおく基礎・理念的特性である。

そして については、人間と環境からなる人間生活を利用者中心の発想から捉えていくことへの知識を基礎とする特性である。これは、利用者本位の観点から、利用者自らの権利義務や社会的自律性の育成をソーシャルワーカーが支援するために、人権と社会正義の具体化に向けた知識を志向する基礎・実践的的特性である。 については、利用者の生活実体とそこで生じる事象をエコシステムとして理解することへの知識を基礎とする特性である。これは、日常的で個別・具体的な利用者生活の生態把握に向けて、一方でシステム分析を他方で時系列変容を提供するエコシステム把握とその具体的な方法の構想化への知識を重視する基礎・実践的的特性である。

については、社会福祉に関連する問題認識と解決過程を見据えた方策推進への応用を意味する特性である。これは、わが国における生活の多様性を背景としたニーズの複雑多岐化に対応する価値創造に向け、ミクロからマクロまでの状況アセスメントとそれに基づく解決過程を推進する方策を展開する応用・理念的特性である。 については、社会福祉を取り巻く問題解決に向けた多角的方法展開への方策的応用を図る特性である。これは、参加と協働を鍵概念に、ソーシャルワークの多様なレパートリー活用による統合的実践を、他職種連携・地域 NW を見据えながら展開する方策に基づく応用・理念的特性である。

については、これまで乖離が一大課題とされてきた理論と実践の統合化を図る方法の応用的展開を意味する特性である。そのためには、支援ツールを活用したエコシステム構想の展開から科学的知見を可視化し、ソーシャルワーカーが駆使する支援技術によって利用者との協働に向けた方法を具体化する応用・実践的的特性である。最後に については、ソーシャルワーク実践への方法や施策の点検から、改善・整備を図る方法の応用的

特性である。そのためには、ミクロな実践をマクロな施策へとフィードバックすることが不可欠で、その循環過程のなかで業務点検、改善整備、改善計画、施策改革を目指した方法を展開する応用・実践的的特性である。

(3) ジェネラル・ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践

ジェネラリスト・ソーシャルワークのわが国における具体的展開については、わが国独自の専門的な支援方法を精緻する必要性から、ジェネラル・ソーシャルワークにおいて、利用者自身の力を促進するエンパワメント実践過程を考察していくことが重要であることを把握した。そのため、ジェネラル・ソーシャルワークにおけるエンパワメント概念の位置づけについて検討を行い、エンパワメントが過程や方法を規定する志向性を備えた概念として位置づけることを明らかにした。エンパワメントは、ジェネラリスト・ソーシャルワークやジェネラル・ソーシャルワークと結びつきながら、利用者をめぐる複合的課題の解決を目標に、利用者の営む生活に立脚した支援を起点とした理論に基づく方法論として検討できると考えられる。

すなわちエンパワメントは、ジェネラル・ソーシャルワークにおいて志向概念であり、その過程展開と方法、それに基づく成果に影響を与えている。加えてジェネラル・ソーシャルワークにおける1アプローチとしてのエンパワメント実践の具体的な実践過程を検討する際には、 ストレングスからパワーへの過程、 個人的、对人的、政治的側面を備えたミクロからマクロへの過程、 反省・行動・評価という思考と行動の間の相互作用による過程、 対話・発見・発達の局面展開による過程の重要性を先行研究により理解できた (Solomon1976 ; Saleebey2006 ; Cowger1994 ; Adams 2003 ; Mileyら 2013)

(4) エコシステム構想におけるコンピュータ支援ツール

一方でジェネラル・ソーシャルワークは、前述のとおり、学際的な諸科学の協働によって成立する支援科学を背景に、エコシステム視座を基盤として利用者固有のミクロな課題解決からマクロな制度・政策の整備とサービス点検までを包括・統合化する体系的な理論である。しかしそれがいかに精度の高い理論であっても、利用者の現実や抱える生活課題の解決から遊離しているのでは意味がない。理論と実践を結び、ジェネラル・ソーシャルワークを利用者の自己実現への支援に具体的に应用できる実践行動概念が必要となる。そのアイデアこそが、実践の展開方法とコンピュータ支援ツール(以下、支援ツール)を備えたエコシステム構想である。

太田(2003)によるとエコシステム構想は、ジェネラル・ソーシャルワークの中心理論と

してのエコシステム視座を、実践場面で応用可能な実践理論として具体化する試みである。これまでエコシステム視座は、利用者の生活を認識する思考方法や発想の域を超えず、抽象性の高いメタ理論に留まっていた。エコシステム構想では、その思考枠組みを誰の目にも明らかになるよう外在化し、かつ利用者とソーシャルワーカーで築く支援過程の展開場面で応用可能な方法としての具現化を目指している。

それには、エコシステム視座という理論的な思考の枠組みに、生活コスモス理解に向けた利用者の生活の実像に迫るソーシャルワーカーのチャレンジと、利用者自身の洞察との積み重ねから構築された実践での知を注入し、理論的枠組みに収まる実践内容を検討することが欠かせない。このようにエコシステム構想は、理論的な枠組みと実践内容を相補的に織り交ぜながら、理論と実践との架け橋となる中範囲概念として提案されるものである。そしてこの構想を科学的な方法によって展開するために、支援ツールが開発されているところである。これらを通じてエコシステム構想は、利用者を目の前にする現実場面で適用可能な実践行動概念として機能する。

エコシステム構想は、コンピュータを用いて支援を科学化する試みであり、情報処理とシミュレーション、ビジュアル化によって利用者のおかれている生活の状況理解を促進する。この支援ツールを用いて生活に関する情報を収集する質問への回答結果を通じて、利用者の生活コスモス認識をソーシャルワーカーの専門性から把握し、生活の構造や機能、そして変容過程が、支援局面を通じて描き出される仕組みとなっている。このことは、利用者の暮らしを外在的にビジュアル化し、利用者とソーシャルワーカーの協働による対話をも可能にする。その過程では、広範で系統的な生活状況理解への情報を的確かつ迅速に処理することにより、利用者の自己理解を深めるとともに、ソーシャルワーカーに専門的な判断への根拠を提供するという生活への意味づけを可能にする側面も備えている。

そのためまずは、エコシステム視座の人間と環境、そしてその交互作用という理論的な側面を基礎に、生活構成の具体化、もしくは対象や分野、アプローチ、局面などを特定していくことにより、場面や過程に応じた生活の構造や機能、そして変容過程が、支援局面を通じて描き出される仕組みを、理論だけでも実践だけでもないその乖離を埋めるための中範囲で検証しながら構築することが不可欠となるであろう。それによって、利用者の現実に可能な限り迫りながら、具体的な実践場面で応用することができる。

(5) 支援ツール活用に向けたアセスメント指標の開発

現在の施策的動向である新しい地域包括支援体制の下で機能する地域包括支援センターにおいて、ソーシャルワーカー（主に社会福祉士）が展開する専門的な方法論としては、米国におけるジェネラリスト・ソーシャルワークの導入が積極的に図られている。わが国では、それらを積極的に取り入れながらも、わが国独自の新しい方法や展開過程の精緻化を目指す、ジェネラル・ソーシャルワークという方法論も提案されており、その導入の必要性が高い地域包括支援センターを起点として、アセスメント指標開発の実践フィールドに取り上げた。地域包括支援センターは、各地域の高齢者をめぐる支援で主要な役割を担っている。そこでは、対利用者への個別な生活への支援のみならず、関係機関やインフォーマルな社会資源との連携・協働、それらをふまえた地域課題の提起など、その実践範囲がミクロからマクロに渡る。そのためまさにジェネラル・ソーシャルワークが求められる。その地域包括支援センターにおけるソーシャルワーク・アセスメントの項目作成についてアセスメント構造と具体的な質問項目を整理・検討した。

その具体的な検討の流れは、以下のとおりである。

- 1) 先行研究からのアセスメント情報抽出
- 2) アセスメント情報の検討・精査
- 3) 質的帰納的方法を用いたアセスメント情報の分析とそれに基づく構造化
- 4) 地域包括支援センター職員へのアセスメント指標に関するインタビュー調査
- 5) インタビュー結果をふまえたアセスメント指標の形成
- 6) アセスメント指標を検証する量的調査の実施

なお本研究は、研究上の倫理に配慮するために、高知県立大学社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会からの承認を得て実施した。

まず1)では、地域包括支援センターを中心とした高齢者福祉領域の文献から、高齢者の生活のアセスメントに必要な質問項目の抽出を行った(922項目)。次に、この作業をとおして得られた項目に関して、2)アセスメント情報の検討・精査を進め、3)質的帰納的方法を用いたアセスメント情報の分析とそれに基づく構造化を目的にカテゴリー化を行った。具体的には、質問項目を内容の類似性と相違性に着目しながらカテゴリー化することで、個別具体的な質問から概念レベルへと抽象度を高めていく作業を行った。その結果、心配事、希望、長所、認知・行動特性、自己認識、価値観、健康状態、医療的対応、整容、生活動作、家事能力、問題対処、住居、経済、職歴、人間関係、近所づきあい、信仰、コミュニケーション、情報の活用、外出、楽しみ、社会参加、権利擁護、介護状況、関係、役割、協力、問題、意向、相談相手、親族、知人・友人、近所の人、地域住民、ボ

ランティア、担当ワーカー、専門職間連携、組織、信頼関係、リスク管理、緊急対応、介護保険サービス、インフォーマル、外出手段、権利擁護サービス、ネットワーク、地域ニーズの把握の48項目を抽出することができた。

この項目を具体化した質問をもとにアセスメント指標を量的調査によって検証した。そこでは、全国の地域包括支援センター1,000か所に郵送調査を行い、回収した調査票のうち、170件を分析対象とした。探索的因子分析(主因子法、エカマックス回転)を行い、因子負荷が1つの因子について0.40以上で、かつ2因子にまたがって0.40以上の負荷を示さない23項目を選出した。その結果、第1因子(近所の人、知人・友人、人間関係、コミュニケーション)、第2因子(協力、関係、介護状況、役割、意向)、第3因子(家事能力、外出、生活動作、整容、権利擁護、医療的対応、経済、社会参加、健康状態、住居)、第4因子(信頼関係、組織、リスク管理、担当ワーカー)が抽出された。また信頼性の検討のため、クロンバックの係数を算出したところ、各因子とも.75以上の内部一貫性がみられた。一方で同時に回答を得たWHOQOL26との相関について、ピアソンの積率相関係数を用いて相関係数を算出した。検定の結果 $p < 0.01$ で有意となり、相関係数 $r = 0.506$ で比較的強い相関があった。この指標を基盤にした支援ツールを開発し、現場で検証していくことについては、共通基盤としての支援ツールの開発遅れに伴い課題が残された。

今回の本調査と課題をふまえ、利用者と協働できるアセスメントシートと支援ツールの開発と刷新を今後も継続して進めていきたいと考えている。

引用文献

- Adams, R. (2003) *Social Work and Empowerment*, Palgrave Macmillan.
- Cowger, C. D. (1994) Assessing Client Strengths : Clinical Assessment for Client Empowerment, *Social Work*, 39(3), 262-268.
- Saleebey, D. ed. (2006) *The Strengths Perspective in Social Work Practice*, Allyn and Bacon.
- Solomon, B. B. (1976) *Black Empowerment : Social Work in Oppressed Communities*, Columbia University Press.
- Miley, K. K., O' Melia, M. and Dubois, B. L. (2013) Generalist Social Work Practice : An Empowering Approach, Allyn and Bacon.
- 太田義弘 (2003) 「ソーシャルワークの臨床的展開とエコシステム構想」『龍谷大学社会学部紀要』22, 龍谷大学社会学部学会, 1-17.
- 太田義弘 (2013) 「ソーシャルワーク原論 -

講義録 - 」関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科 .

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

西梅幸治 (2018) 「ソーシャルワークにおける社会構成主義の意義と課題 エンパワメント実践との関連から」『高知県立大学紀要』(査読有) 67, 41-55 .

西梅幸治 (2017) 「ジェネラル・ソーシャルワークにおける生活への視座に関する研究」『高知県立大学紀要』(査読有) 66, 13-25 .

西梅幸治 (2016) 「ジェネラル・ソーシャルワークにおけるエンパワメントの位置」『高知県立大学紀要』(査読有) 65, 13-29 .

西梅幸治 (2015) 「ソーシャルワークにおけるエンパワメント実践の構成概念 - ストレngthsとパワーに着目して - 」『高知県立大学紀要』(査読有) 64, 17-32 .

中村佐織・西梅幸治・加藤由衣 (2015) 「地域包括支援センターにおけるアセスメント方法の構築 - ソーシャルワーク支援ツールの検討 - 」『福祉社会研究』(査読無) 15, 75-92 .

[学会発表](計 1 件)

加藤由衣・西梅幸治・中村佐織 (2015) 「地域包括支援センターにおけるアセスメント方法の構築 - エコシステム視座からの指標の検討 - 」第32回日本ソーシャルワーク学会(日本社会事業大学:東京)

[図書](計 1 件)

太田義弘他編著・西梅幸治他 (2017) 『高度専門職業としてのソーシャルワーク 理論・構想・方法・実践の科学的統合化』光生館, 共著(第2章3:25-30, 第6章3:79-83, 第7章1・2:85-92, 資料編3:165-167.)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西梅 幸治 (NISHIUME KOJI)
高知県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号:00433392